

本学における社会福祉士養成・社会福祉 援助技術現場実習の現状と課題(その2) 現場実習指導の課題

- 実習学生と施設の事後評価比較をもとに -

畑 智恵美・大西 敏浩・信田光子・鈴木 壽恵

(平成19年9月29日受理 最終原稿平成19年12月7日受理)

社会福祉士養成課程における教育の質が議論されている。そのような状況のもと、本学における社会福祉援助技術現場実習および実習指導の現状と課題を明らかとすることが本研究の目的である。2003年度から2005年度にかけて23日間180時間以上の現場実習を終了した学生303名を対象に学生自己評価と施設評価のデータを用いて統計的分析手法により比較検討をおこなった。その結果、施設評価、学生自己評価ともに「基本的態度」評価が高く、「専門的知識」と「実習ノート」の評価が低い結果となった。しかし、施設評価と学生自己評価の相関は全体的に低く、学生の評価は中心傾向が高く現れた。これらの結果から、実習指導における「基本的知識」や「実習ノート」の指導の在り方を再検討していく必要性が確認されるとともに、事後指導の重要性も認識された。さらに、学生、教員、実習施設指導者の3者の間のコミュニケーションを深めていける体制づくりも大きな課題である。

キーワード：社会福祉士養成、社会福祉援助技術現場実習、施設評価、学生自己評価

1. はじめに

1987年に制定された社会福祉士及び介護福祉士法において、社会福祉士は、「専門的知識及び技術をもって、身体上若しくは精神上の障害があること又は環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導その他の援助をおこなうこと(相談援助)を業とする者をいう。」(法第2条第1項)とその専門性を定義された。その中で、専門職としての養成教育の重要性が明確化され、教育カリキュラムとして、現場実習が義務化された。20年経過した今、社会福祉士制度の見直しに当たって、養成教育カリキュラムの再検討がおこなわれている。その検討内容の詳細はまだ明らかとなっていないが、中心的課題は、現場実習教育体制の見直しと援助技術演習の強化であり、社会福祉士の任用の拡大につながるような専門性の向上をめざしている¹⁾²⁾。特に、社会福祉士の養成コースを設置している4年制大学や社会福祉士養成の専門学校が加盟している(社)日本社会福祉士養成校協会では、社会福祉士制度見直しに向けて、「今後の社会福祉士養成教育のあり方について(提案)」³⁾を厚

生労働省に提出している。そのなかでは、3つのモデルカリキュラムを提示し、特に実習時間の十分な確保を提案している。

このような社会福祉士養成教育をめぐる議論がなされている状況下、現在、社会福祉士国家試験受験資格取得のための養成課程においては、社会福祉施設における23日180時間以上の現場実習が義務付けられ、実習学生にとっては非常に意義深い体験となっている⁴⁾⁵⁾。一方、社会福祉施設では、社会福祉基礎構造改革などの流れから、利用者の権利擁護や人権へのより一層の配慮が求められている⁶⁾。その一方で、経営面や職員待遇面⁷⁾では厳しさが増しており、学生の指導にあたる専任職員を配置できる環境には無く、通常業務との兼務で実習学生の指導にあたっているのが実情である。そのような厳しい状況の中で実習生を受け入れている。そのような意味からも実習学生の受け入れを依頼する養成校の責任として、事前及び実習中の実習指導を十分に実施することが求められている。このため、本学における社会福祉士養成コースにおける社会福祉援助技術現場実習および実習指導の状況を分析し、抱える課題を明らかとする必要がある。本研究では、本学における社会福祉士国家試験受験資格指定科目である社会福祉援助技術現場実習B終了後の事後評価について、施設指導者評価と学生の自己評価の比較を中心に統計的に分析し検討することにより、指導課題を明確化していくことを目的とした。これらの結果は、今後の事前学習や事後学習の指導に活かすことができると考える。

2. 対象と方法

対象は、2003～2005年度にかけて、社会福祉施設において23日間180時間以上の現場実習（カリキュラム上の名称は、社会福祉援助技術現場実習B）⁸⁾を終了した学生303名である^{註1)}。実習施設は、高齢者福祉施設、障害者福祉施設、児童福祉施設（母子生活支援施設および障害児福祉施設を含む）相談機関の4つの種別である。その内訳を表1に示す。実習評価内容は、「専門的知識（施設の目的・機構・機能の理解、知識技能）」、「対人関係（職員・利用者等との人間関係）」、「実習ノート（提出期限、丁寧さ、まとめ方）」、「基本的態度（健康管理、礼儀、時間・規則の遵守）」、「実習態度（責任感・主体性・協調性・明朗性）」、及び「総合評価」であり、加えて自由記述の総合所見よりなっている。実習施設の指導担当者に「6=非常によい」「5=良い」「4=やや良い」「3=もう少し努力が必要」「2=努力が必要」「1=かなり努力が必要」の6段階評価を依頼した。実習学生自身の自己評価は、施設評価と対応した「専門的知識」、「対人関係」、「実習ノート」、「基本的態度」、「実習態度」の5領域の内容となっており、施設評価と同様の6段階評価となっている。学生の自己評価は、領域ごとに下位項目を設定し、それぞれに評価得点とその理由を記述するようにしているが、今回の分析では、各領域における総合の自己評価を用いている。また、実習終了後の「自己覚知・自己理解」「対人援助技術実践への理解」「福祉専門職への意欲の高まり」「福祉関係学習への意欲の高まり」の程度について6段階の自己評価を実施している。施設の評価表を資料1として、学生自己評価表を資料2として添付する。これらの評価項目は、全国社会福祉協議会の『新・社会福祉施設「現場実習」指導マニュアル』⁹⁾の評価に関する内容をもとに設定されたものであり、かつ、実習受け入れ

施設側からの了解も得られている尺度であるため、内容的には妥当性を確保しているものと考えられる。

実習期間は、各年度共に6月から7月にかけての1ヶ月間である。その後1ヶ月以内に評価表の回収をおこなった。回収率は100%である。

研究手法は、統計的分析を用いた。分析では、5つの評価項目はすべて単項目であり、順序尺度であるため²検定および相関分析¹⁰⁾を用いた。5つの評価項目の合計得点に関しては、分散の正規性と信頼性が確保できたため、t検定、一元配置の分散分析および相関分析を検討した。分析にはSPSS 15.0J for Windowを用いている。データはすべて数値のみとし、学生個人や施設が特定される情報はすべて削除して、個人情報保護に配慮した。

3. 結果

実施年度ごとの実習学生の性別と施設種別内訳は表1に示すとおりである。施設評価結果、学生自己評価結果の度数分布をそれぞれ表2、表3に示す。

施設評価、学生自己評価の内容の検討を行う目的で、各項目の評価内容から上位群（非常に良い・良い）、中位群（やや良い）、下位群（もう少し努力が必要～かなり努力が必要）の3群

表1 実施年度と施設種別の内訳

種別 年度	高齢		障害		障害児		児童		相談		合計 (名)
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
2003	17	17	6	21	3	8	9	28	1	4	114 (男36・女78)
2004	8	27	3	14	0	8	7	18	2	3	90 (男20・女70)
2005	15	23	4	15	1	7	10	21	1	2	99 (男31・女68)
合計 (名)	40	67	13	50	4	23	26	67	4	9	303 (男87・女216)
	107		63		27		93		13		

表2 施設評価結果・度数分布

項目	非常に 良い	良い	やや良い	もう少し 努力が必要	努力が必要	かなり 努力が必要	合計
	上位群		中位群	下位群			
専門的知識	14 4.6%	93 30.7%	150 49.5%	41 13.5%	5 1.7%	0 0.0%	303 100%
対人関係	42 13.9%	136 44.9%	91 30.0%	31 10.2%	3 1.0%	0 0.0%	303 100%
実習ノート	28 9.2%	121 39.9%	107 35.3%	44 14.5%	3 1.0%	0 0.0%	303 100%
基本的態度	82 27.1%	142 46.9%	65 21.5%	11 3.6%	3 1.0%	0 0.0%	303 100%
実習態度	51 16.8%	134 44.2%	82 27.1%	32 10.6%	4 1.3%	0 0.0%	303 100%
総合評価	33 10.9%	148 48.8%	106 35.0%	15 5.0%	1 0.3%	0 0.0%	303 100%

表3 学生自己評価・度数分布

項目	評価						合計
	非常に 良い	良い	やや良い	もう少し 努力が必要	努力が必要	かなり 努力が必要	
	上位群		中位群	下位群			
専門的知識	4 1.3%	73 24.1%	125 41.3%	81 26.7%	11 3.6%	0 0.0%	294 97.0%
対人関係	12 4.0%	96 31.7%	130 42.9%	49 16.2%	6 2.0%	0 0.0%	293 96.7%
実習ノート	7 2.3%	69 22.8%	123 40.6%	86 28.4%	8 2.6%	1 0.3%	294 97.0%
基本的態度	73 24.1%	133 43.9%	68 22.4%	15 5.0%	2 0.7%	2 0.7%	293 96.7%
実習態度	29 9.6%	115 38.0%	105 34.7%	41 13.5%	3 1.0%	0 0.0%	293 96.7%
自己覚知	17 5.6%	105 34.7%	115 38.0%	47 15.5%	4 1.3%	1 0.3%	289 95.4%
実践理解	23 7.6%	108 35.6%	122 40.3%	30 9.9%	7 2.3%	0 0.0%	290 95.7%
専門職意欲の 高まり	62 20.5%	111 36.6%	77 25.4%	34 11.2%	6 2.0%	0 0.0%	290 95.7%
学習意欲の高まり	76 25.1%	131 43.2%	68 22.4%	13 4.3%	1 0.3%	1 0.3%	290 95.7%

欠損値のため100%となっていない。(N=303)

に再分類し、性別、実習施設種別を独立変数に²検定をおこなった。なお、実施年度での層化の分析についても検討したが、1セルあたりの度数が低くなるため分析には不適であること、および、この3年間の実習指導方針に変更が無く年度による違いは学生の資質による要因のみであると考えられることから、今回の分析からは除外した。また、施設種別の分析については、相談機関における実習数が少ないため、これを除外し、高齢関連施設、障害関連施設、児童関連施設の3分類とした。ここで、障害児施設は障害と児童の両方の特徴を持っているが、根拠法の分類にしがたい、児童関連施設に組み入れている。

(1) 施設評価結果

表2の度数分布より読み取れるいくつかの特徴が認められる。まず、いずれの評価項目においても、「もう少し努力が必要」「努力が必要」など下位群にあたる評価は5%から15%前後と多少開きはあるものの割合的には少なくなっていることである。しかし、上位、中位群の分布も含めてみると、「専門的知識(施設の目的・機構・機能の理解、知識技能)」の「非常に良い」と「良い」が併せて35%程度と最も低く、「基本的態度(健康管理、礼儀、時間・規則の遵守)」では、「非常に良い」と「良い」が併せて74%と最も高くなっている。「実習ノート(提出期限、丁寧さ、まとめ方)」の評価も「対人関係(職員・利用者等との人間関係)」や「実習態度(責任感・主体性・協調性・明朗性)」と比較するとやや低くなっている。「総合評価」としては、「非常に良い」と「良い」が併せて約60%であり、各評価項目の平均的なところで評価さ

れていることがわかる。

表4に性別を独立変数とした²検定結果を示す。性別では、「実習ノート」の評価結果で男女差が認められ、0.1%水準で有意であった（²値=15.3）。具体的には、女子学生では半数以上が高い評価を受けているが、男子学生では、上位、中位、下位がほぼ同程度となっており、女性の方が高い評価を受ける割合が高い。総合評価を含めその他の評価項目では、性別による有意な差は認められなかった。

表5に施設種別を独立変数とした²検定結果を示す。「実習ノート」（²値=15.9）と「基

表4 性別による施設評価の特徴（²検定）

評価		上位	中位	下位	合計	² 値
専門的知識	男	34 39.1%	40 46.0%	13 14.9%	87 100%	.802 n.s.
	女	73 33.8%	110 50.9%	33 15.3%	216 100%	
	合計	107 35.3%	150 49.5%	46 15.2%	303 100%	
対人関係	男	51 58.6%	27 31.0%	9 10.3%	87 100%	.125 n.s.
	女	127 58.8%	64 29.6%	25 11.6%	216 100%	
	合計	178 58.7%	91 30.0%	34 11.2%	303 100%	
実習ノート	男	32 36.8%	31 35.6%	24 27.6%	87 100%	15.3***
	女	117 54.2%	76 35.2%	23 10.6%	216 100%	
	合計	149 49.2%	107 35.3%	47 15.5%	303 100%	
基本的態度	男	63 72.4%	21 24.1%	3 3.4%	87 100%	.811 n.s.
	女	161 74.5%	44 20.4%	11 5.1%	216 100%	
	合計	224 73.9%	65 21.5%	14 4.6%	303 100%	
実習態度	男	51 58.6%	25 28.7%	11 12.6%	87 100%	.304 n.s.
	女	134 62.0%	57 26.4%	25 11.6%	216 100%	
	合計	185 61.1%	82 27.1%	36 11.9%	303 100%	
総合評価	男	49 56.3%	33 37.9%	5 5.7%	87 100%	.592 n.s.
	女	132 61.1%	73 33.8%	11 5.1%	216 100%	
	合計	181 59.7%	106 35.0%	16 5.3%	303 100%	

n.s.有意差無, ***p<.001

表5 実習施設種別による施設評価の特徴(χ²検定)

評価		上位	中位	下位	合計	χ ² 値
専門的知識	高齢	40 37.4%	52 48.6%	15 14.0%	107 100%	3.53 n.s.
	障害	29 39.2%	37 50.0%	8 10.8%	74 100%	
	児童	32 29.1%	58 52.7%	20 18.2%	110 100%	
	合計	101 34.7%	147 50.5%	43 14.8%	291 100%	
対人関係	高齢	62 57.9%	37 34.6%	8 7.5%	107 100%	7.32 n.s.
	障害	48 64.9%	19 25.7%	7 9.5%	74 100%	
	児童	57 51.8%	34 30.9%	19 17.3%	110 100%	
	合計	167 57.4%	90 30.9%	34 11.7%	291 100%	
実習ノート	高齢	57 53.3%	37 34.6%	13 12.1%	107 100%	15.9**
	障害	43 58.1%	26 35.1%	5 6.8%	74 100%	
	児童	40 36.4%	43 39.1%	27 24.5%	110 100%	
	合計	140 48.1%	106 36.4%	45 15.5%	291 100%	
基本的態度	高齢	85 79.4%	18 16.8%	4 3.7%	107 100%	13.9**
	障害	61 82.4%	11 14.9%	2 2.7%	74 100%	
	児童	67 60.9%	36 32.7%	7 6.4%	110 100%	
	合計	213 73.2%	65 22.3%	13 4.5%	291 100%	
実習態度	高齢	70 65.4%	28 26.2%	9 8.4%	107 100%	9.65*
	障害	48 64.9%	21 28.4%	5 6.8%	74 100%	
	児童	57 51.8%	32 29.1%	21 19.1%	110 100%	
	合計	175 60.1%	81 27.8%	35 12.0%	291 100%	
総合評価	高齢	69 64.5%	34 31.8%	4 3.7%	107 100%	12.1*
	障害	49 66.2%	24 32.4%	1 1.4%	74 100%	
	児童	52 47.3%	48 43.6%	10 9.1%	110 100%	
	合計	170 58.4%	106 36.4%	15 5.2%	291 100%	

n.s. 有意差無, * p<.05, **p<.01

本的態度」(t 値 = 13.9) が1%水準で有意であり、「実習態度」(t 値 = 9.65) と「総合評価」(t 値 = 12.1) が5%水準で有意な結果となった。具体的には、「実習ノート」では高齢関連施設と障害関連施設における評価の傾向は類似しており、上位50%台、中位30%台となっているが、児童関連施設では、上位、中位共に30%台の評価を受けている。下位評価も約25%と他と比較して多くなっている。「基本的態度」においても、高齢関連施設と障害関連施設における評価の傾向は類似しており、上位80%程度、中位15%程度となっているが、児童関連施設では、上位評価は約60%と20%ほど少なく、中位評価が30%程度と多くなっている。基本的態度の評価は全体として高い中、児童関連施設では低い評価を受ける学生が多い結果となっている。「実習態度」「総合評価」では、5%水準の有意差であり、大きな差異は認められないが、やはり、児童関連施設における評価結果が、高齢や障害の領域と比較して、上位評価が少なく、下位評価が多いという結果となっている。

(2) 学生自己評価結果

表3の学生自己評価の度数分布から読み取れる特徴は、「専門的知識」、「対人関係」、「実習ノート」で「非常に良い」とする者が5%未満と少なく、一方、「基本的態度」では、24%と約1/4の者が「非常に良い」としていることである。全体傾向としては、「専門的知識」、「対人関係」、「実習ノート」については、「やや良い」を中心に「良い」と「もう少し努力が必要」に分布しており、「基本的態度」「実習態度」については、「良い」を中心に「非常に良い」と「やや良い」に分布している。相対的に「態度」に対する自己評価が高いことがわかる。また、実習終了後のふりかえりの項目である「自己覚知・自己理解」と「対人援助技術実践への理解」では、「やや良い」が40%程度で最も多く、次いで「良い」、「もう少し努力が必要」の順になっている。「福祉専門職への意欲の高まり」と「福祉関係学習への意欲の高まり」の意欲への自己評価では、「良い」が40%前後で最も高く、「非常に良い」と「やや良い」が同程度で20%から25%と比較的高くなっている。

表6に性別を独立変数とした t 検定結果を示す。学生の自己評価では性別では、「対人関係」で男女差が認められ、5%水準で有意であった(t 値 = 8.63)。具体的には、「対人関係」では、女子学生では中位の評価が約47%と最も多いのに対し、男子学生では、上位の評価が50%と最も多く、対人関係に対して自己評価の高い男子学生の割合が多い結果となっている。その他の評価項目では、性別による有意な関係は認められなかった。

表7に施設種別を独立変数とした t 検定結果を示す。学生の自己評価では、実習施設の種別による有意な関係性はいずれの評価項目においても認められなかった。

(3) 施設評価と学生自己評価の比較

表8には、施設評価と学生評価の比較を行う目的でおこなった t 検定結果と相関分析の結果を示す。ここで、相関分析は素点を用いており、施設評価と学生評価の一致度のめやすとした。 t 検定では、施設評価を独立変数、学生自己評価を従属変数としている。「実習態度」で

表6 性別による学生自己評価の特徴 (χ^2 検定)

評価		上位	中位	下位	合計	χ^2 値
専門的知識	男	24 30.0%	34 42.5%	22 27.5%	80 100%	1.11 n.s.
	女	53 24.8%	91 42.5%	70 32.7%	214 100%	
	合計	77 26.2%	125 42.5%	92 31.3%	294 100%	
対人関係	男	40 50.0%	30 37.5%	10 12.5%	80 100%	8.63*
	女	68 31.9%	100 46.9%	45 21.1%	213 100%	
	合計	108 36.9%	130 44.4%	55 18.8%	293 100%	
実習ノート	男	21 26.3%	29 36.3%	30 37.5%	80 100%	1.74 n.s.
	女	55 25.7%	94 43.9%	65 30.4%	214 100%	
	合計	76 25.9%	123 41.8%	95 32.3%	294 100%	
基本的態度	男	58 72.5%	17 21.3%	5 6.3%	80 100%	.266 n.s.
	女	148 69.5%	51 23.9%	14 6.6%	213 100%	
	合計	206 70.3%	68 23.2%	19 6.5%	303 100%	
実習態度	男	47 58.8%	24 30.3%	9 11.3%	80 100%	4.15 n.s.
	女	97 45.5%	81 38.0%	35 16.4%	213 100%	
	合計	144 49.1%	105 35.8%	44 15.0%	303 100%	

n.s. 有意差無, * p<.05

は、0.1%水準で有意 (χ^2 値 = 27.6) であり、「対人関係」では 1%水準で有意 (χ^2 値 = 15.6)、「基本的態度」では 5%水準で有意 (χ^2 値 = 11.0) であった。また、全体として評価した総合評価では 1%水準で有意 (χ^2 値 = 17.5) であった。

具体的には、最も高い有意な関係性が認められた「実習態度」では、施設評価上位群の 57.5% が自己評価上位、施設評価中位群の 45% が自己評価中位、施設評価下位群の 40.6% が自己評価下位となっており、それぞれ最も高い割合となっている。しかし、施設評価の中位群と下位群では施設評価より高い自己評価をおこなっている者もそれぞれ 30% 程度認められる結果となっている。また、施設評価上位群では 33% 程度が自己評価中位としている。

「対人関係」では、施設上位評価のうち 44.2% が自己評価上位、施設中位評価のうち 51.7% が自己評価中位となっている。しかし施設評価下位群では自己評価中位が 40.6% と最も高く、自己評価下位は 37.5% であった。ここでも学生の自己評価が甘くなっている傾向が認められ

表7 実習施設種別による学生自己評価の特徴（²検定）

評価		上位	中位	下位	合計	² 値
専門的知識	高齡	26 24.8%	39 37.1%	40 38.1%	105 100%	2.65 n.s.
	障害	19 25.7%	34 45.9%	21 28.4%	74 100%	
	児童	27 26.0%	46 44.2%	31 29.8%	104 100%	
	合計	72 25.4%	119 42.0%	92 32.5%	283 100%	
対人関係	高齡	41 39.0%	47 44.8%	17 16.2%	105 100%	1.52 n.s.
	障害	26 35.6%	30 41.1%	17 23.3%	73 100%	
	児童	38 36.5%	47 45.2%	19 18.3%	104 100%	
	合計	105 37.2%	124 44.0%	53 18.8%	282 100%	
実習ノート	高齡	25 23.8%	42 40.0%	38 36.2%	105 100%	2.54 n.s.
	障害	22 29.7%	28 37.8%	24 32.4%	74 100%	
	児童	27 26.0%	48 46.2%	29 27.9%	104 100%	
	合計	74 26.1%	118 41.7%	91 32.2%	291 100%	
基本的態度	高齡	78 74.3%	21 20.0%	6 5.7%	107 100%	3.00 n.s.
	障害	54 73.0%	16 21.6%	4 5.4%	74 100%	
	児童	66 64.1%	29 28.2%	8 7.8%	103 100%	
	合計	198 70.2%	66 23.4%	18 6.4%	282 100%	
実習態度	高齡	51 49.0%	38 36.5%	15 14.4%	104 100%	2.40 n.s.
	障害	41 55.4%	22 29.7%	11 14.9%	74 100%	
	児童	46 44.2%	40 38.5%	18 17.3%	104 100%	
	合計	138 48.9%	100 35.5%	44 15.6%	282 100%	

n.s. 有意差無

表 8 施設評価と学生自己評価の比較 (²検定, 相関分析)

項目		学生自己評価			合計	² 値	相関係数 (素点間)	
		上位	中位	下位				
専門的 知識	施設 評価	上位	33 31.7%	44 42.3%	27 26.0%	104 100%	4.25 ^{n.s.}	.112 ^{n.s.}
		中位	36 24.7%	62 42.5%	48 32.9%	146 100%		
		下位	8 18.2%	19 43.2%	17 38.6%	44 100%		
	合計	77 26.2%	125 42.5%	92 31.3%	294 100%			
対人 関係	施設 評価	上位	76 44.2%	71 41.3%	25 14.5%	172 100%	15.6 ^{**}	.212 ^{***}
		中位	25 28.1%	46 51.7%	18 20.3%	89 100%		
		下位	7 21.9%	13 40.6%	12 37.5%	32 100%		
	合計	108 36.9%	130 44.4%	55 18.8%	293 100%			
実習 ノート	施設 評価	上位	38 25.9%	62 42.2%	47 32.0%	147 100%	5.32 ^{n.s.}	.114 ^{n.s.}
		中位	32 31.4%	39 38.2%	31 30.4%	102 100%		
		下位	6 13.3%	22 48.9%	17 37.8%	45 100%		
	合計	76 25.9%	123 41.8%	95 32.3%	294 100%			
基本的 態度	施設 評価	上位	160 73.1%	49 22.4%	10 4.6%	219 100%	11.0 [*]	.195 ^{**}
		中位	41 66.1%	15 24.2%	6 9.7%	62 100%		
		下位	5 41.7%	4 33.3%	3 25.0%	12 100%		
	合計	206 70.3%	68 23.2%	19 6.5%	293 100%			
実習 態度	施設 評価	上位	103 57.5%	59 33.3%	17 9.5%	179 100%	27.6 ^{***}	.312 ^{***}
		中位	31 37.8%	37 45.1%	14 17.1%	82 100%		
		下位	10 31.3%	9 28.1%	13 40.6%	32 100%		
	合計	144 49.1%	105 35.8%	44 15.0%	293 100%			
総合 評価	施設 評価	上位	78 44.6%	50 28.6%	47 26.9%	175 100%	17.5 ^{**}	.237 ^{***}
		中位	28 27.2%	45 43.7%	30 29.1%	103 100%		
		下位	9 60.0%	4 26.7%	2 13.3%	15 100%		
	合計	86 29.4%	99 33.8%	44 15.0%	293 100%			

n.s. 有意差無, * p<.05, **p<.01, ***p<.001

学生自己評価における総合評価は、各項目の合計点より3分割したものである。

る。

「基本的態度」では、施設評価上位群の73.1%が自己評価上位で高い一致度を示している。一方、施設評価中位群、下位群ではいずれも自己評価上位がそれぞれ66.1%、41.7%と最も高くなっており、自己評価の高い傾向が強く認められる。

「専門的知識」と「実習ノート」の評価では有意な関係が認められなかった。すなわち、「専門的知識」と「実習ノート」の評価項目においては、施設評価結果と学生評価の結果に特定の関係性は見出せないということになるが、上位群は低く自己評価し、下位群は高めに自己評価している傾向は認められる。

実習全体を通しての「総合評価」では、学生自己の総合評価はおこなっていないため各評価項目の合計点の分布をもとに上中下の3群に再分類している。施設評価上位群の44.6%が自己評価上位、施設評価中位群の43.7%が自己評価中位としており、最も高い割合となっている。しかし、施設評価下位群では、人数は少ないものの自己評価上位が60%と最も高く、次いで自己評価中位26.7%、自己評価下位13.3%と全体として自己評価が高い結果となっている。

相関係数¹¹⁾では、「専門的知識」、「実習ノート」、「基本的態度」で、0.2以下であり、ほとんど相関が無いと判断される数値である。また、「対人関係」、「実習態度」、「総合評価」で弱い正の相関があるとされる数値である。すなわち、全体として、施設評価と学生評価の一致度はかなり低いものとなっている。

(4) 全体的傾向

5つの評価項目「専門的知識」、「対人関係」、「実習ノート」、「基本的態度」、「実習態度」について、施設、学生自己評価でそれぞれ内の一貫性を確認したところ、施設評価ではクロンバッハの α が0.84であり、学生の自己評価ではクロンバッハの α が0.73と一定の信頼性が確認できたため、それぞれ5項目の合計点を算出した。施設評価合計得点、自己評価合計得点を従属変数とし、全体傾向を確かめる目的で、パラメトリック分析として、相関分析、t検定および一元配置の分散分析を実施した。

記述統計量と相関分析結果を表9に示す。その結果、施設評価と学生評価の合計得点間の相関係数は0.28と低い値であり、弱い相関となっている。すなわち、施設評価結果と学生の自己評価結果が単純に比較できないことを示しており、評価項目別の²⁾検定結果を裏付ける結果となっている。

また、施設評価合計得点と学生自己評価合計得点のそれぞれを従属変数に、性別を独立変数

表9 5項目合計得点の記述統計量と相関係数

	クロンバッハ	平均値(標準偏差)	相関係数
施設評価 5項目合計得点	.84	22.6(3.41) N=303	.279*** N=291
学生自己評価 5項目合計得点	.73	21.4(3.02) N=291	

***p<.001

**表10 施設評価合計得点および学生自己評価合計得点を従属変数とした分析
性別による t 検定**

	平均値 (標準偏差)		t 値 (自由度)
施設評価 合計得点	男	22.5(3.53) N= 87	t=-1.01 ^{n.s.} (301)
	女	23.0(3.35) N=216	
学生自己評価 合計得点	男	21.9(3.37) N= 80	t=1.68 ^{n.s.} (289)
	女	21.2(2.87) N=211	

施設種別による一元配置の分散分析

	平均値 (標準偏差)		F値 (自由度)	多重比較
施設評価 合計得点	高齡	23.1 (3.21) N=107	F(2,290)=5.28**	障害 > 児童** 高齡 > 児童 †
	障害	23.6 (2.93) N= 74		
	児童	22.0 (3.65) N=110		
学生自己評価 合計得点	高齡	21.4 (3.31) N=104	F(2,279)=.13 ^{n.s.}	n.s.
	障害	21.5 (2.48) N= 73		
	児童	21.2 (3.10) N=103		

n.s.有意差無, † p<.10, **p<.01

にして t 検定を、施設種別を独立変数にして一元配置の分散分析をおこなった結果を表10に示す。施設評価合計得点が施設種別に対して 1 %水準で有意である結果 (F (2,290) =5.28) となっている。その他の要因では有意差は認められなかった。多重比較の結果、障害関連施設における評価が児童関連施設における評価より有意に高いことが確認された。また、高齡関連施設評価と児童関連施設の差にも10%水準の有意傾向が認められた。

4 . 考察

施設評価結果の傾向を把握した上で、それを基本に、学生の自己評価結果との比較を中心に考察を加える。

(1) 施設評価 (表 2 , 表 4 , 表 5)^{註2)}

表 2 に示す施設評価のうち、施設の目的・機構・機能の理解、知識技能に関するの力量を問う「専門的知識」では、「非常に良い」という高い評価を受けることができた学生は 5 %未満であり非常に少ない。「良い」との評価を併せて上位群が35%程度となっている。また、中位群の「やや良い」が約半数であり、全体としては中程度の評価を受けているが、他の項目と比較するともっとも厳しい評価となっている。すなわち、それまでの実習経験もふまえた上での事前学習は十分とは言えず、根拠法をはじめとした施設の役割や機能の理解が、実践の場で活かせる知識としてはまだ不十分であることが推測される^{12) 13)}。また、援助技術演習等で学んだ技術や知識に関しても、実習の場で職員の方から評価されるような形の自己表現することのむずかしさを表しているのではないかと考える。このことは、同時に、専門的知識や技術に対する事前指導の不十分さが現れたものとして受け止めることができる。すなわち、実習の事前指導における机上の学びと実践との橋渡しが重要な課題であると考えられる。

一方で、健康管理、礼儀、時間・規則の遵守の状況を評価する「基本的態度」は、27%以上の学生が「非常によい」と高い評価を受け、上位群としては74%となっている。この基本的態度とは、一般社会で必要とされるマナーやルールでもある。実習指導においては、初回の現場実習の経験をふりかえるとともに、現場実習として利用者の生活の場へ入っていくことの意義を再確認しながら、マナーやルールに関して繰り返し確認し、自覚を促していることなどが実践での評価に結びついたものと考えられる。

職員・利用者等との人間関係の取り方を評価する「対人関係」と責任感・主体性・協調性・明朗性を評価する「実習態度」は非常に関連性の高い項目であると考えられる。ここでの評価結果も類似した傾向を示している。「非常によい」が15%前後で、上位群としては60%となっているが、積極的に関わっていくことが苦手な利用者や職員との関係性において問題を抱える学生も一定割合含まれると思われる。巡回指導の経験からは、実習において問題を抱えて悩む学生は、特に初対面の人間関係に苦手意識が高く、積極的に行動したり、利用者に主体的に関わっていくためにはかなりの時間を要している。実習期間終盤にはかなり改善されているものの、基本的な「対人関係」苦手意識は克服できていない。このことは看護領域での研究であるが藤野らの指摘¹⁴⁾とも一致する傾向である。この点に関しては、実習中の早い段階での支持的な助言指導（巡回指導）が重要となると考える。

提出期限、丁寧さ、まとめ方の能力を問う「実習ノート」に関しては、チームワークが基本の福祉の現場においては情報伝達や情報共有という観点からも重要な内容であるが、慣れない環境の中で毎日書かなければならないこと、短い時間で考えをまとめ表現しなければならないことなどから、学生自身のふりかえりの時間も実習中には十分取れないのが現状である。このことが、全体として評価が低いこと（上位群が50%未満であること）の一因であると考えられる。事前学習として行っている初回現場実習の実習ノートのふりかえりはグループ学習の形で実施しているが、個別指導という形では不足していると考えられる。4月から6月までの実質1.5ヶ月間の事前指導では、全体指導、個別指導あわせて、実習計画書の指導までで手いっぱい状況であり、書くこと、表現することに苦手意識をもつ学生に対して実習ノートの書き方に関する個別指導時間を十分にはとることができていないことも改善すべき課題として挙げられる。

また、表4の性別による比較（²検定）からは、「実習ノート」の評価において顕著な性差が認められている。一般に女子学生の方が文字が見やすくまとまっており、几帳面に表現することが得意であるものが多い。男子学生は乱雑に書いてしまうことが多く、また、文章で表現することに慣れていないものの割合が高いように感じる。このことは、通常のレポート課題を通して経験的に見出しているところである。このような性差の傾向を説明するための根拠は、先行研究からは見だせておらず、ここでは、分析対象としている本学学生の特徴的な傾向として理解しておくことにとどめる。そして、「実習ノート」の事前指導においては、書くことを苦手とする男子学生の存在をしっかりと把握した上での重点的な指導が必要であることが示されたと考えられる。

次に、表5に示す²検定の実習施設種別の違いについて考察する。「専門的知識」と「対人

関係」では実習施設種別による違いは認められていないが、それ以外の評価項目「実習ノート」「基本的態度」「実習態度」および実習全体に対する評価「総合評価」で施設種別による有意な関係性を認めている^{註3}。施設種別による違いの程度は評価項目によって異なるが、傾向は一致しており、児童関連施設での評価が高齢関連施設や障害関連施設における評価と比較して、上位群が少なく、下位群が多いという傾向を示している。池田らの報告¹⁵⁾においても、施設評価を施設種別で分析した結果として、児童関連施設評価が最も低いことが示されているが、その理由は明確とはされていない。

児童関連施設で実習を希望する学生の理由は、初回実習では多くが、「見学実習で子どもと関わって楽しかった」「子どもはかわいいから好き」「ボランティアで子どもから好かれた」などであった。本実習では、「困難を抱えた子どもへの支援方法を学びたい」などの目標をあげる学生いるものの、「一緒に楽しく過ごすこと」を中心に据えており、やはり学生にとっては年齢的にも近く理解しやすく関わりやすい存在として受け止められているようである。しかし、児童関連施設では、宿泊実習も多く、子どもたちの昼中の活動的な一面を見るだけでなく、生活の流れの中で家庭の理由により施設で生活せざるを得ない子どもたちの抱えるすべてのものと向き合うことになる。また、職員の「親的な」責任のある対応を目の当たりにすることになる。このような状況の中で、入所児童には被虐待児が多く、子どもへの対応が極めて難しくなっているという現実の厳しさに立ちすくんでしまう実習経験となったものが多かったのではないかと推測する。実際に、本実習の学生の感想からも「子どもたちと職員の信頼関係がしっかり築かれていることは感じ取れたが、自分はどうか対応してよいかわからず戸惑った」という記述が多く認められている。

一方、障害者施設は、知的障害や重複障害を持つ利用者の施設が中心であり、初回実習では、「どう関わっていいかわからない」「近寄りにくい」「利用者は何もできない」といった初期イメージを持つ学生が多い中、実習後の感想では、「利用者の素直な対応や積極的な姿勢がうれしかった」と利用者へ癒されたり、「作業に熱心に取り組む利用者の姿を見て感動した」など新しい発見も多く、実習生自身にとっても楽しい実習体験となっていた。本実習では、そのような点に加えて、将来は障害関連施設で働きたいとする学生も多く、利用者に関わることに明確な目的意識を持って取り組めたのではないかと推測される。このことが良好な評価を受ける者が多い結果となったと考える。

高齢者施設での実習は、関わり方の難しい認知症の方もおられる一方で、実習生のことを孫のような存在としてかわいがり、励ましていただける利用者も多い。また、「大学では学ぶことのできない直接のボディタッチも含む介護を教えていただき実践させてもらったことがとても勉強になった」さらには、「利用者のケアプランを通して具体的に支援について理解することができた」など高齢者施設の実習指導で意欲的に取り組めたとする学生も多い。そのような環境の中で、個別支援への学びも含め、実習生自身も意欲を持って利用者に関われる実習となり、全体として良好な評価を受けることのできた学生が多くなったのではないかと推測する。

また、評価項目ごとで見られた差異については、評価基準の明確なもののほど、大きな差異が

でたのではないかと推測している。実習ノートは実際の記述を見て評価することが可能であり、基本的態度は、日ごろのマナーや規則の遵守などで評価するため、日ごろの状況から客観的に見えやすい内容である。児童関連施設においては、児童や職員との関係性や対応の仕方などで抱える困難さの結果としてわかりやすい形で現れていたのではないかと推測する。

以上のことから、現在は明確化できていない実習施設種別の指導内容を検討する必要性があり、特に事前指導における重要な課題であると考ええる。

（2）学生自己評価（表3，表6，表7）

学生自己評価に関しては、資料2の評価表に示すように、項目ごとにそれぞれの具体的内容についての自己評価と理由を記述の上で、総合的な評価をたずねている。

表3の結果からは、「専門的知識」「対人関係」「実習ノート」の自己評価がやや低い方に偏っていることが認められる。「専門的知識」では、多くが施設の法的根拠や関連施設・制度・社会資源に対する理解不足を理由としてあげている。「対人関係」では利用者のニーズへの気づきの難しさをあげている。また、「実習ノート」では誤字・脱字の問題、的確な表現方法の難しさをあげている。施設評価結果に対する考察でもふれたが、これらの傾向は、実習指導の事前学習指導体制で強化すべき課題として、講義科目などの机上の学習内容を実習指導の中でどのように具体化していくかや小規模クラスで実施される援助技術演習とどのように連携をとっていくかなどの点が挙げられる。

また、自己評価の最も高い「基本的態度」では、時間の遵守や身だしなみに対してかなりの自信を示している。「実習態度」では、自身の明朗さや人権尊重・プライバシーの保護の遵守ができていと判断している学生が高い自己評価につながっている傾向にある。事前学習においては、初回の実習体験へのふりかえりを含めて、「現場実習」が利用者の生活の場へ入り込むことであり、利用者にとってどのような意味を持つものであるかを繰り返し考えさせており、「基本的態度」や「実習態度」においての謙虚さと積極性の重要性を強調して指導している。その結果として、学生の意識の中に定着していたと推測する。

また、表3の実習終了後の自分自身の理解度や意欲に関する自己評価では、自己覚知や社会福祉援助技術の実践への理解は不十分ではあるが、約1ヶ月間の実習体験により、専門職や学習への意欲が向上した学生が多いことは重要な結果である。益満らの研究¹⁶⁾では、実習学生は、実習中は慣れない生活環境、対人関係の中でストレスを感じながらも、実習終了後も実習施設との関係性を積極的にとっているものが多いことを挙げて意味ある実習体験であるとしている。本学においても、実習評価の高低に関わらず、実習経験により、前向きな意欲が引き出された者が多く、現場実習が意義深い体験であったと考えることができる。

表6の性差からは、「対人関係」においてのみ、男子学生の方が女子学生より高い自己評価を行っている割合が高い結果となっているが、その理由記述からは、女子学生の方が利用者との十分なコミュニケーションをとることが難しかったとするものが多いことが見受けられた。しかし、性差については、施設評価からは、「実習ノート」においてのみ認められている。「対

人関係」に対する自己評価の性差は、関係性に対する認識の違いが現れているのであり、実際の状況とは異なる可能性も高い。

表7の実習施設種別による違いは、学生の自己評価からは全く認められなかった。この傾向は、池田らの報告¹⁷⁾とも一致する内容である。学生の認識のレベルでは、施設の種類によって特別に困難を感じたり、充実感が高まったりといった違いはないようである。施設評価と学生評価の違いについては、比較を通して次の項でさらに考察を深めることにする。

(3) 施設評価と学生自己評価の比較(表8)

(1)で考察した施設評価と(2)で考察した学生自己評価の間には幾分乖離が認められるため、施設評価を軸に学生の自己評価がどのようにずれているかを統計的検定により評価した。ここで、施設側の評価は、毎年多くの実習生を受け入れ、評価してきている経験から、ある程度の信頼性、妥当性をおくことができると考えられるため、独立変数として設定している。また、一致度が高ければ、相関係数は高い値を示し、表8のクロス表の対角部分(網掛け部分)の分布が高くなり、²検定において有意な関係性は強くあらわれると期待される。

²検定で有意な関係性が認められた「実習態度」「対人関係」「総合評価」では、相関係数からもある程度の一致度はあるものの、いずれの場合にも施設評価上位群の自己評価は低い方へも分布しており、施設評価中位群の自己評価は高い方と低い方に広く分布している。施設評価下位群では中位、上位にも自己評価している学生が存在している。学生の自己評価の傾向は、より平均的なところで評価しようとしている傾向が強いように思われる。したがって、低い評価を受けた学生の自己評価は甘くなる傾向があり、高い評価を受けた学生はそれほど確信が持っていないためか中程度の評価となる傾向があるのではないかと考える。有意な結果とならなかった「専門的知識」と「実習ノート」の自己評価においては、施設評価上位群では自己評価が低くなる傾向が強く、施設評価下位群では自己評価が高くなり中程度評価に集まるという傾向をより明確に示している。一方、学生の自己評価が最も高い「基本的態度」では、²検定で5%水準の有意は認められたが、相関係数は低く、施設評価が中位群、下位群の学生も高い割合で自己評価を高くしており、“自分ではできているつもり”のものが多いことが推測される。

学生が自分自身の実習をふりかえりこれを評価する場合、実習施設の指導担当者からどの程度のフィードバックを受けていたか、また、担当教員がどの程度施設指導者と学生の間でつなぐ役割を果たすことができたかが影響すると考えられる¹⁸⁾。実習生と施設の指導者と担当教員の3者の間での話し合いが十分になされる中で実習を進めることができれば、一つ一つの評価に対して実習生も納得しながら取り組むことができたであろうし、事後評価においても施設評価とのズレは小さいと期待される。一部少数の施設では3者のコミュニケーションが取れているが、全体としては、このような観点からの指導体制は確立することができておらず、学生は自分の実習内容に対してどの程度の評価できるか確信が持たず、無難な中程度の評価に偏るのではないかと考える。

このように、施設評価と比較する中でこのような学生の自己評価の特徴を分析することは、実習指導上の指導体制や施設との連携の取り方などいくつかの重要な課題を見出すことができ、非常に有意義であった。

（4）全体的傾向（表9，表10）

これまでのノンパラメトリック検定の結果を確認し、全体的な傾向を把握する目的で、施設評価、学生自己評価の総合得点を用いたパラメトリック検定をおこなっているが、その結果からいくつかの傾向が再確認できた。施設評価と学生自己評価の合計得点間には弱い相関しか認められないこと、性別による有意差は施設評価、学生自己評価ともに認められないこと、施設種別による差は、施設評価においてのみ、児童関連施設での評価が他の施設による評価より有意に低い傾向が認められることである。これらの全体傾向は、検定の結果からの評価項目ごとの知見を裏付けるものとなっており、学生の自己評価に関する課題と実習施設種別に応じたきめ細かい事前学習や実習指導・巡回指導の必要性を再確認させるものであった。

5．結論

本学の社会福祉士の国家試験受験資格の要件である社会福祉援助技術現場実習B終了後の施設指導者による評価と学生の自己評価、それぞれ2003年度から2005年度のデータの内容を統計的に分析検討し、さらに比較分析することにより、現場実習評価の実態を把握した。それらの知見をもとに社会福祉士養成のための社会福祉援助技術現場実習指導における事前学習、事後学習の課題および実習指導上の課題を明らかとすることができた。

施設評価からは、専門的知識の不足を読み取ることができた。学生の自己評価も最も低く、制度や法律、社会資源に対する知識不足に対する反省をあげているものが多い。制度、法律、社会資源は講義科目を中心に既に学んでいるが、その内容は、実践の場で役立つ知識というよりは、その背景を理解する上での知識であり、具体的なイメージと結び付けることが難しく、身につけていないものが多いことが推測された。実習指導の事前学習においては、既に学んだ知識を実習する施設に特化させてしっかりと学びなおし、重要なポイントをまとめるなど、実習の場で役立つ知識として再構築する必要がある。

実習ノートに関する評価は、施設評価、学生自己評価ともに、専門的知識に次いで低いものとなっており、実習指導上の重要な課題であることが明らかとなった。実習ノートのまとめ方については、実習施設の書式に従う場合もあるが、基本的には、事前学習においてしっかりと個別指導しておくことが求められる。特に、日々の実習の中で、観察したこと、実践したこと、それから学び考えたことが区別され、わかりやすくまとめられなければならない。記述の書式、記述の内容、文字の丁寧さなど、事例を用いて事前学習としてしっかりと指導しておくとともに、巡回指導の中で施設指導者と連携を取りながら指導していくことも重要である。

基本的態度については、施設評価、学生自己評価ともに高く、最も事前学習と実習指導の効

果が認められるものであった。

実習ノートに対する施設評価には、性差が認められ、男子学生より女子学生の評価が高い結果となった。日常のレポート課題においても、まとめ方、文字の丁寧さなどにおいて女子学生のほうが優れていると経験的に感じるところと一致している。実習ノートは、実践場面における日々のケース記録などの記載において求められる能力を養う目的もあり、大切なものである。実習指導において、文字表現を苦手とする学生を抽出し、十分な個別指導できる体制作りをおこなう必要がある。

実習施設種別による施設評価の違いが認められた。児童関連施設の評価が、障害関連施設、高齢関連施設と比較して低い結果となった。児童関連施設の評価基準が総じてきびしいわけではなく、児童関連施設を希望する学生の初期イメージと実践の場での現実の厳しさの間で立ちすくんでしまい、適切に行動できなかった学生が多いものと推測される。このことに対しては、事前学習の不足が原因の一つとして考えられる。実習配属先が決まった段階から、実習施設の特徴を理解した上で事前学習を進めさせるなど、施設種別を配慮した十分な指導体制をとる必要がある。

施設の評価と学生の自己評価の一致度は低く、学生の自己評価は中央値に集まる傾向が認められる。すなわち、学生自身は「自分は普通には実践できた」と考える傾向が強く、施設で高く評価を受けたものは低めに自己評価しており、施設で低く評価されているものは高めに評価するといった傾向である。この一因として、実習中、実習終了後の反省会を通しての施設指導者と学生間のコミュニケーションが十分ではないことが考えられる。施設指導者と指導教員が連携体制を取って、学生の実習を通しての学びを評価、確認する場面を設ける必要がある。しかし、現実的には、時間、人手の制約から十分な対応をとることは難しい。少なくとも実習中に何らかの問題を抱えた学生に対しては、できるだけすみやかに3者で話し合う場を設けることのできるしくみも必要と考えられる。現状では、事後学習として、施設評価としっかり向き合った上で、実習中の自己をふりかえり見つめなおす時間をとることが重要である。さらに、自己覚知や福祉への意欲の高まりと結び付けていくことが求められる。

いくつかの難しい課題も存在しており、より良い実習指導体制を整えるためには、実習指導担当教員間でどの程度具体化して検討していけるか、また、実習受け入れ施設の指導者とどの程度連携体制が構築できるかが今後の重要な課題であると考えられる。

6. おわりに

本研究では、「専門的知識」「対人関係」「実習ノート」「基本的態度」「実習態度」の5つの評価項目に対する単項目の評価結果を用いて統計的分析をおこなった。実際の実習においては、その5つの評価軸の下位項目として複数の内容が判断基準とされている。評価の背景にある下位項目への評価データを加味することが求められる。また、実習中の教員の指導は、隔週の帰校日と隔週の巡回指導のみとなっているために、5つの評価軸で個別に実習中の学生を評価す

ることは難しいが、事後指導の中で教員の視点からの評価を加えていくことなど、事後指導の充実強化が課題である。さらに、統計的な視点のみによらず、問題を抱えた学生への個別指導事例を分析検討することも必要であると考え。

本学独自の結果として紹介するのみでなく、より普遍的な実習指導の課題を提起し、提案できるように研究を積み重ねていくことも今後の課題である。

また、現場実習は、十分な指導を受けることのできる環境下で実践現場を体験し、社会福祉専門職への意欲を高め、自分自身の抱える課題を発見して、より質の高い学びへと結びつけていくことが重要な目的である。このことが、質の高い専門職養成教育の課題でもある。実習中の評価の高低に関わらず、そこで学んだことを事後学習として統合化していくことも重要な課題であり、この点に関しても今後研究対象としていく必要があると考える。

最後に、実習生を受け入れていただいている各種施設、機関の職員の方からのご指導に感謝申し上げますとともに、さらにより良い実習教育体制作りへのご協力をお願い申し上げます。

あとがき

論文執筆に当たっては、筆頭者がすべておこなった。以下3名は共同研究者として考察、課題の導出に加わった。

参考文献・註

註1) 分析対象の学生には、本学の特徴である実習Aを、介護福祉士の資格を有するために履修免除されたものが含まれているため、303名であり、「本学における社会福祉士養成・社会福祉援助技術現場実習の現状と課題（その1）2段階ステップアップ現場実習の効果と課題」の分析対象236名より多い。ただし、いずれの学生もはじめての長期の現場実習ではないという点では共通している。

註2) 前掲論文（その1）においては、現場実習Bにおける施設評価結果を現場実習Aの評価結果からの変化に焦点を置いて考察している。本研究においても、結果は類似の傾向が認められているが、ここでは、各評価項目への詳細な考察を加えている。

註3) 前掲論文（その1）においては、現場実習Bの評価結果で施設種別による差が認められなかった。この違いは、今回の分析に新たに加わった学生が介護福祉士資格を持つものであり、高齢関連施設と一部障害関連施設での実習は経験しているものの、児童関連施設での経験が全くないことによるものではないかと考えている。

- 1) 社会保障審議会福祉部会資料5「社会福祉士制度の見直しについて」平成18年11月20日、社会保障審議会福祉部会「介護福祉士制度及び社会福祉士制度の在り方に関する意見」平成18年12月12日。
- 2) 日本社会福祉士養成校協会主催シンポジウム「社会福祉士制度改革と養成教育の方向性」平成18年11月25日、日本社会福祉士養成校協会主催シンポジウム「社会福祉士養成教育と社会福祉士試験」平成19年5月26日。
- 3) 日本社会福祉士養成校協会「今後の社会福祉士養成教育のあり方について（提案）」平成18年6月3日、13-25。
- 4) 北川清一・久保田理雅・加藤純、本学『社会福祉援助技術現場実習』（児童施設）の教育効果に関する一研究、テオロギア・ディアコニア、Vol.32、1998、86-87。

- 5) 益満孝一・西原尚之・張世哲ほか、社会福祉援助技術現場実習生の実習の意味について、九州看護福祉大学紀要、Vol.7(1) 2005、107-108。
- 6) 竹沢昌子、社会福祉士養成の実習指導に関する一考察 社会福祉士への意識調査より、沖縄大学人文学部紀要、第2号、2001、67-77。
- 7) 社会保障審議会 - 福祉部会資料 ・村尾俊明、社会福祉士の現状と今後の任用・活用について、2006年11月20日；社会保障審議会 - 福祉部会資料 ・村尾俊明、社会福祉士現況調査結果について、平成19年4月20日。
- 8) 四天王寺国際仏教大学人文社会学部人間福祉学科「現場実習の手引き」平成19年度、7-8。
- 9) 日本社会事業学校連名・全国社会福祉協議会編『社会福祉施設[現場実習]指導マニュアル』全国社会福祉協議会、1996、243-252。
- 10) 古谷野亘、『数学が苦手な人のための多変量解析ガイド』川島書店1988、10-15。
- 11) 森岡清志、『ガイドブック社会調査』日本評論社1998、218-221頁。
- 12) 山井理恵、社会福祉現場実習における学生の自己評価 - 学習成果に関する要因 -、社会福祉実践理論研究、第8号、1995、63。
- 13) 池田雅子・米本秀仁、社会福祉実習における評価について 「実習受入先の評価」と「学生の自己評価」の比較分析を通して、北星論集(文) 第28号、1991、37-42。
- 14) 藤野ユリ子・室屋和子・佐藤一美、看護系大学4年生の学生生活や人間関係に関する認識と社会的スキル、産業医科大学雑誌、Vol.27(3) 2005、268-270。
- 15) 池田雅子・米本秀仁、前掲論文、54-58。
- 16) 益満孝一・西原尚之・張世哲ほか、前掲論文、106-107。
- 17) 池田雅子・米本秀仁、前掲論文、52。
- 18) 南彩子・登丸寿一、社会福祉援助技術現場実習における総合的評価をめざして 学生・現場指導者・教員の三者による評価を通して、社会福祉実践理論研究、第9号、2000、89-100。

資料1：施設による実習評価表

評価項目		6	5	4	3	2	1
1	専門的知識	施設・機関の目的・機構・機能の理解、知識技能					
2	対人関係	職員・利用者等との対人関係					
3	実習ノート	提出期限、丁寧さ、まとめ方					
4	基本的態度	健康管理、礼儀(言葉づかい・身だしなみ)、時間・規則の遵守					
5	実習態度	責任感・主体性・協調性・明朗性					
総合評価							
評価基準：6〔非常に良い〕 5〔良い〕 4〔やや良い〕 3〔もう少し努力が必要〕 2〔努力が必要〕 1〔かなり努力が必要〕							
総合所見	文章による所見（実習に取り組む姿勢を中心にしたコメント）						

資料2：社会福祉援助技術現場実習B・学生自己評価表

社会福祉援助技術現場実習Bについて、次の9項目に沿って自己評価してください。
 評価採点は、6：非常に良い、5：良い、4：やや良い、3：もう少し努力が必要、2：努力が必要、
 1：不合格（かなり努力が必要）の6段階で各項目に対して右の の中に、総合点を の中に
 数字を記入してください。なお、各自が**なぜそのように自己評価したのか、その理由も記入し**
てください。

1 基本的知識 施設・機関の目的・機構・機能の理解、知識技能

評価	質問
	1 実習先の法的根拠について理解できたか。
	2 実習先の目的について理解できたか。
	3 実習先の事業内容について理解できたか。
	4 実習先に関連する他施設、制度、社会資源等に関して理解できたか。
	5 実習先が取り組んでいる課題、目指しているもの等を理解できたか。
	6 実習先で働いている職員の職種について理解できたか。
総合点	

評価理由	
------	--

2 対人関係 職員・利用児者等との対人関係

- | | | |
|---|------------------------------|----|
| 1 | 利用児者について理解できたか。 | 評価 |
| | <input type="text"/> | |
| 2 | 利用児者とのコミュニケーションが十分行えたか。 | |
| | <input type="text"/> | |
| 3 | 職員への質問等、職員と積極的に関わることができたか。 | |
| | <input type="text"/> | |
| 4 | 利用児者が抱えている問題等に気づいたか。 | |
| | <input type="text"/> | |
| 5 | 対人援助技術の実践に対しての理解を深めることができたか。 | |
| | <input type="text"/> | |

総合点

	評価理由
--	------

3 実習ノート 提出期限、丁寧さ、まとめ方

- | | | |
|---|-------------------------|----|
| 1 | 「配属施設概要」欄を記入することができたか。 | 評価 |
| | <input type="text"/> | |
| 2 | 誤字脱字のない日誌を書けたか。 | |
| | <input type="text"/> | |
| 3 | 必要なことをメモすることができたか。 | |
| | <input type="text"/> | |
| 4 | 「実習内容」を記入することができたか。 | |
| | <input type="text"/> | |
| 5 | 「実習の感想、疑問」を記入することができたか。 | |
| | <input type="text"/> | |
| 6 | 「反省」を記入することができたか。 | |
| | <input type="text"/> | |
| 7 | 的確な表現で記録できたか。 | |
| | <input type="text"/> | |

総合点

	評価理由
--	------

4 基本的態度 健康管理、礼儀（言葉づかい・身だしなみ）、時間・規則の遵守

1	利用者・職員に対し、きちんとした挨拶や言葉づかいができたか。	評価
	<input type="text"/>	
2	集合時間・見学時間の遵守はできたか。	
	<input type="text"/>	
3	自己の健康管理はできたか。	
	<input type="text"/>	
4	実習学生として謙虚な姿勢で実習に臨めたか。	
	<input type="text"/>	
5	実習の場にふさわしい清潔感のある身だしなみを心がけたか。	
	<input type="text"/>	
総合点		
	評価理由	

5 実習態度 責任感・主体性・協調性・明朗性

1	意欲的・積極的に実習に取り組めたか。	評価
	<input type="text"/>	
2	利用児者の人権・人格を尊重し、プライバシーを保護することができたか。	
	<input type="text"/>	
3	職員・他の実習生と協同して業務の遂行することに努めたか。	
	<input type="text"/>	
4	実習指導職員等の指導・助言を理解することができたか。	
	<input type="text"/>	
5	明るく朗らかに実習を行えたか。	
	<input type="text"/>	
6	指示されたことがらに最後まで責任を持って行えたか。	
	<input type="text"/>	
総合点		
	評価理由	

6 自己覚知（自己理解）ができたか。

総合点

	評価理由
--	------

7 社会福祉援助技術実践に対する理解が深められたか。

総合点

	評価理由
--	------

8 社会福祉の専門職に対する意欲が高まったか。

総合点

	評価理由
--	------

9 福祉関係の学習に対する意欲が高まったか。

総合点

	評価理由
--	------